

《第三十話》

岩船の湯(夫沢)

むかし。

岩船にイトというばあさんが住んでいました。大へん正直者でありよく働くのでみんなにはめられていましたが、困ったことにカサッポという皮膚病に悩まされていました。葉草で洗ったり、くすりをつけたりしましたが一向によくありません。近所にもクサッポで苦しんでいる人もたくさんいました。

ばあさんは何とかしてこの業病をなおしてしあわせになりたいものと近くの神様に毎朝お詣りにいきました。

ある晩ふしぎな夢をみました。

「家の東十間の所をほってごらん。湧きでる清水をわかつて洗えば必ず治る。」とおつげで目がさめました。

ばあさんは朝起きて家族の人たちにこの話をしましたが誰も信用してくれません。しかたなしに、ひとりで道具を持ってでかけました。そこははじめじめした谷地でした。水はすぐ出ました。